



本を読むことにおもしろくのめりこむ

なかむら かずひこ
教育学域長 中村 和彦

本を読むことが好きです。教育学や運動学といった専門書も読みますが、小説や紀行記、随筆といった類の本もよく読みます。百科事典や図鑑を眺めることも大好きです。その意味で、図書館は、私の生活に欠かすことのできない大切な、そして素敵な場所です。

ところで、いまの日本の子どもたちは、おもしろく本を読んでいるのでしょうか？ 本を読むことにのめりこんでいるのでしょうか？ 私の専門分野は発育発達学です。そこで本稿では、今日の子どもの生活を顧みながら、本とのふれあい、読書のおもしろさについて考えていきたいと思います。

1. 子どもの頃の図書館の思い出

私は、山梨大学のあるここ甲府で生まれ育ちました。実家は甲府市南部の青沼町で、湯田小学校、甲府南中学校で学びました。小学校時代・中学校時代とも、学校の図書室は、私にとって非常に魅力的な場所でした。また当時、家の近くにあった遊亀公園に市立図書館があり、そこにもよく通っていました。物語や伝記に自分自身が入り込み、動物や虫の図鑑を飽きることなくながめ、昔の出来事にドキドキし、世界の街々に思いを馳せていました。

子どもの頃は、誰からも強制されることなく、自らひたすら本の世界にのめり込んでいたような気がします。大人になってからは、一定の時期にあるジャンルの本を読むことに夢中になっていました。星新一のSFやアガサクリスティの推理小説をむさぼり読み、遠藤周作や村上龍の考え方に心を震わせ、そして60歳を迎えた今は、吉田修一、石田衣良、重松清の本が必ず1冊はバックの中に入っています。本を読むことが好きになった原点は、間違いなく子ども時代の本との豊かな出会いであったと思います。

2. 「持ち越し効果」とは

発育発達学の研究に「持ち越し効果」という分野があります。私たちは、学習し経験した時に、多くの事柄を知り、技能を習得しながら、さまざまな能力を高めることができます。しかしそれだけでなく、ある要因を含んだ優れた学習や経験は、その後の人生において、学習をし続けたり経験をしてみようとする動機づけとなるのです。

いま日本人の運動実施率は、世界の最低ラインとなっています。昨年12月に実施された全国調査によると、日本の成人の週1回以上の運動実施率は、わずかに53.6%です。では運動をしている人と運動をしていない人には、どのような違いがあるのでしょうか？

多くの人は、子どもの頃にスポーツ少年団、運動部活動などでスポーツ活動をした人は運動を続けている、または子どもの頃から運動の得意な人が運動を持ち越していると思われるのではないのでしょうか。しかし実際に検証してみると、子どもの頃の競技スポーツの経験や、運動の得意不得意は、大

人になってからの運動実施の持ち越しに大きく影響する要因にはなっていないのです。

実は子ども時代に、自らおもしろくのめり込んだ遊びの経験こそが、子ども時代の運動実施だけではなく、「運動をしようとする力」や「運動をし続けようとする力」を生み出し、運動の実施に大きく影響するものであることが解っています。

本を読むことも運動することと、全く同様だと思います。子どもの頃に、一定の時間本を読むことを強要されたり、知識を得ることだけのために本を読むことを経験しても、生涯にわたる読書の持ち越しには繋がりません。「おもしろく」「のめり込みながら」「自ら」本を読むことが重要なのです。しかし、今日の多くの子どもが、自らおもしろくのめり込む読書経験をしているとは思えません。

3. 大人が生み出した子どもの生活の乱れ

私は、日本の子どもたちの生活が乱れ「子どもらしさ」が失われた原因は、「子ども」にあるのではなく、私たち「大人」にあると考えています。

私たち日本の大人は、ずっと便利な社会を求めてきました。その結果、我が国の効率化、自動化、情報化は、世界の最先端となり、かつて経験したことのない利便性の高い生活を手に入れることができました。しかしその過程において、日本の将来を担う子どもたちにとって最も大切な、豊かなこころと健やかなからだの育みを失ってしまったのではないのでしょうか。

今の日本には、子どもに知識や技能の習得のみを求め、目先の結果だけを評価する大人が非常に多く存在していると思います。そして子どもから「おもしろく本を読むこと」「おもしろく運動すること」を奪っているのでは？と考えています。

4. 「プレイリード」「リーディングリード」の大切さ

運動遊びも読書も、教えること、指導することができません。指導することで、遊びや読書の中に存在する、自主性、自由性、創造性がなくなってしまう。結果的に、「おもしろく」「のめり込む」「自ら」といった持ち越しの要因が消失してしまうのです。

ドイツには「プレイリーダー」、オーストラリアには「プレイデリバラー」という、子どもの遊びを先導する、遊びを届けるという役割の大人が存在します。運動技能の指導やスポーツの勝敗にこだわる日本のスポーツ指導者とはまったく異なり、子どもの遊びを保障する存在です。

近年わが国においても、文部科学省（スポーツ庁）が推奨し、スポーツ外郭団体や自治体、企業、NPOなどが主体となり、「プレイリーダー」の養成と「プレイリード」の考えを普及する取組が始まりました。この取組は、全ての子どもたちがおもしろくのめり込みながら身体を動かすことを目指しています。私は、この「プレイリード」の考えの広がりこそが、大人になってからの運動の持ち越しに繋がり、健やかな育みを保障するものであると確信しています。

同じように、本を読むことのおもしろさを伝える「リーディングリーダー」の養成や、「リーディングリード」の考えを広めていくことが必要であると思います。お父さんお母さん・保育士・教師といった子どもの身近にいる大人が、その重要性を認識することが必要であると思います。

そのことが本を読むことに夢中になり、のめり込んでいく子どもを育み、生涯にわたって本からいろいろなことを学び感じ取れる、豊かな生き方を保障するものであると考えます。

